ほやのいしき　十一

雑
10
十一

ロ 9
3585
11

門 番號 355 巻 11

早稲田大学図書

𠮷高

似せものゝ判目録

愚夫の妻貞道心ほちくのゝ事 付り 詩歌評判義論之事
御夫の妻行状之事 付り 右同断

明治三十六年十一月五日
坪内雄蔵氏寄贈

東京牛込區大久保餘丁町百廿番地 坪内雄藏

似せものゝ判

我おさなきとき物語どきゝけりいつの時にかありけんひとり
の武士ありけり又隣家に二十ばかりの武士ありけるにとなり
なりければ常に往来してむつましうかたりたがひに昵
ともたのもしけるが一人の武士ハ死去にほどなく彼が妻女
ハその隣家とあまりむつましければにあるとき二十
ばかりの士と密通せし噂に妻にもあらせけり其
妻ハそのよりしをわれ士人なりてやはりなりそれ
より病の床にふして命を終る十日ばかりに成まかりて父母
なしみてやまひのやうを問どもいへば医師脈をうかゞへ
ども其肺肝とも見ずして六脈はかるにおよばずつぎその
髄気のわるくおもくしれど命をたもちがたく見んて我

労瘵なりとむといひて逍遥散に加味となして茯苓補心
湯を用ひ虚労にはかれこれ安全にもちゆべしと或は補中益
気湯とりかへて知らず薬しかけ此の増とこそなれ又は
鬱風なりといひまづ香蘇散に加味となして死剤
ならくはらひて瞑眩とうすひるがへれどもはちらに
もるしあかれば医師も薬のおもひつりなすといふ也
居うぐなすしやうれんともとくまじれりのをしそとへ
いはず死命ここに極まり一人の武士彼が病とられい朝夕
にともなふ日頃よ申されけるある時武士病吏に問云ていふき
愛の病気何とも心得ずし父母問ひ給へども答へ給はず
医師様にいうなへども病の見るべきなしといふ云ればい
ふなりにとりつくはかなみたまふ日ごろむつましき

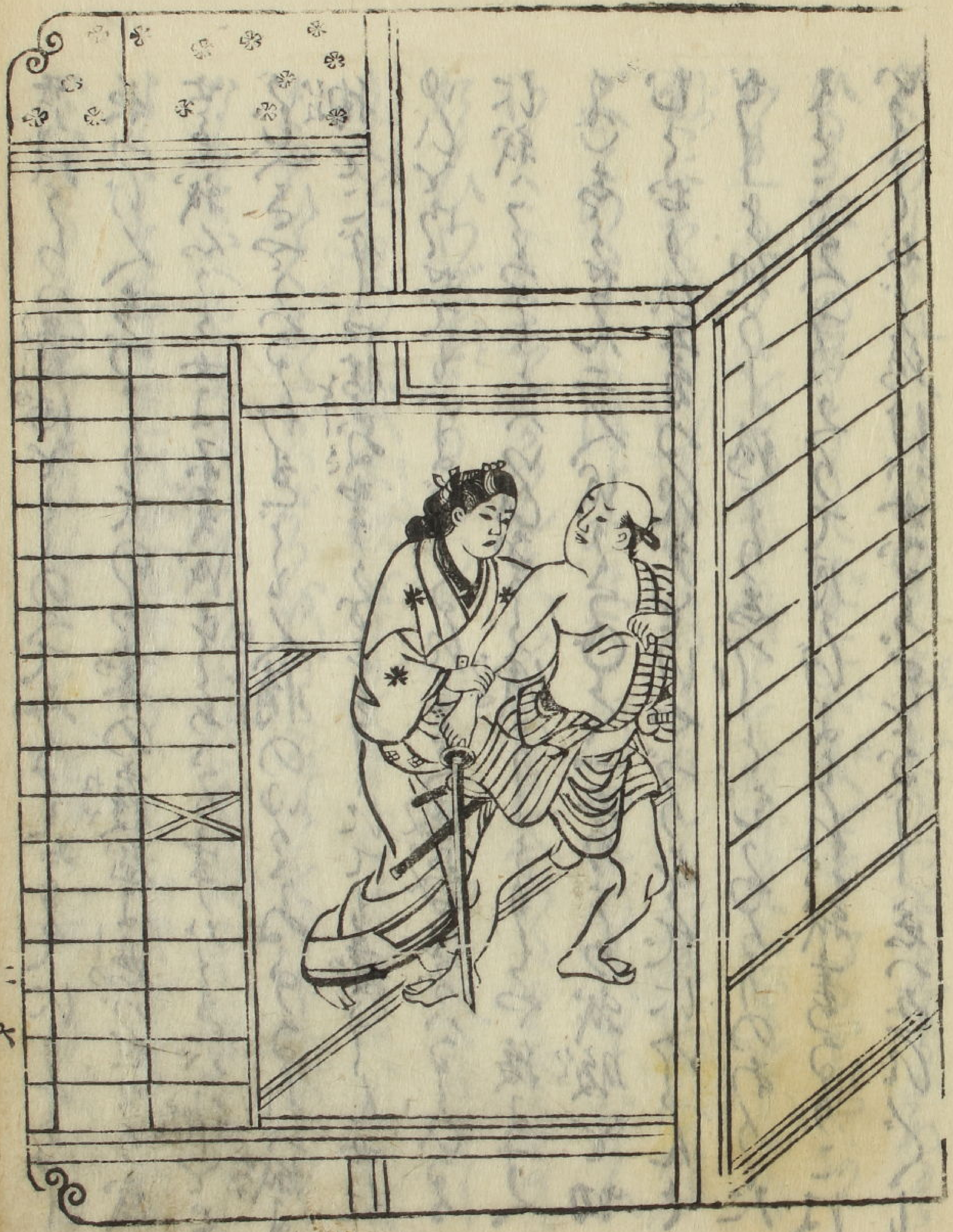
切なるは他人よりひとかたならぬ事あるに問ひしかば陳んが
さかなる人よりしらじと此事なるバ氏の神とうけて
神より我よりはらけじ我ながらに縁りぬべかりしは世の
中にあらじと云思ひといふやまひいやまふに今なすなれバ
身命にかへても望をかなへまゐらせんといへどもかたく再三
問ひかけるによりやうやうおもひ起しまゐらせてたてまつる
これまで乃江湖問道すぐしもさうじけかし貴家につつむ
すればふなみだもこまかにしんよりいふも貴家
れんきざいまくは我が力にかなふなれども今我おもひ
におぼつかなくさし縁よ跡しく死せんのとしひ
また武士の云さりで我身にかなふまじいかで安かるべし
ちかるになどはみ縁ふや我は他ならでおもひきまく

まことに其身ハいまだ我とへだてありとおもひ侍らん　かくてハ
なぐさめてとへバ病者もたゞおもひの切なるよりや　よつてハ
あらしなからかなしくもあれ天魔の入たる
かりそめやうん仏神三宝にもおそくらまたくまつり
あるやうん貪欲といへどもはるかまじき我思ひあれハ死ともに
どもかくるまじとおもへども今其身切にとひたまへバ
これまでの信実誠意にあらしく語らずして死すべきよ
くやしくぞくりのこし死での障までもうらみとならんと
そのむかしけれどもひとつとも噺なりし児女子なりて又
かるへだてなくすべき事にもあらず今我病ハ其
原はようのうるとも必ず語まゐらせしけ給ふ
此外がおもひとかりて其身源切のことどと捕ざるのを

さらしおかずハ何國其身の宅より御内室にまみへてよ
ましげなくいておるまじ児生なれど口をとしく懐
ましくおもひまるべきとおもへども此状ハ夢覚まして面
目にそのわがころやうもちて見ぬが児男に申
傍も其身のまへも面目なれども待まくとひ給へハ
又よわらくこそなりけまくゆるまじまずれ
事と我もおもへバ必ず語まゐらせ病よおと
ろへるを腹とわくしてまことになどごとうるべて
いかさ武士すておもひの外なる事ならバ去ばしハあされ
てりの紙もいらずすうろ其事とまぐハ同まじ児相
とおりくり此武士と愚痴すやおかさんとうじやり男にゆ
ますすかいぞいとやられまし氏の弥けておしくぞと

つねにしが変しなくやおもひくんそれそいてやまと
きまるすり令にはなくおもひ給ふをたすじくハなれ
るまべうまくこそのさまへ一さびかるどまくつしらん
わかせまそてまつりんやせむらきけるまでうけやまいの
おとろへまくハなるまじくなれバ忠の後とらるを
し病まし給へ於立給ひくのちうそかうてや
そくしてゆりうり病もハいてあつうしきるすとへおも
ひたがら支欲にひかれくんぞいとられしくうま
よりやまひ日くよいつく食すらしべほどなく
平癒しく武士のたちをおそしとこそハ浪人なり武士
ハ其妻にむかるらいひとつぎいふや夫婦の中ま
しそハひざされまられどもくれすわるとバいへども

浪人悪まし江すにおりへどもてびちうれにおよぶやす
まじでし物せしハ変しがかてうけるしなり白
ハ今の命死せんとその後たまけ浪人ハたれなり善
どんまぞわしめ我よりくして義まよりら浪人まう変
まうめ我志りくゆるそうすなきバねかくらしかるん
はすらえ浪人でらもつろべしといへども妻のぞまん
まかどれすとおもひしと妻いうおもひくんほとろ
うしくまうひくそれそやそれすまり此ふやまそれ
いつく志のぞせ浪人と夫ぬん後おわり緣援夫にらく
といへでもびんすくようこび貧かれずで衣服つ浪ひ
てお閑の宵に武士の宅よゆれ



宵からハ肴酒とゝのへてみるにおりそにしてなし
夜ふけ人しづまりてのち妻の寝屋に忍びせられ武
士も我から女に不義ばしかくる事ならバ行跡と
がむべきやうなけれども人情のゆるさぬすまれバ俄に
胸とこがし口惜き事なれをしにても妻うらん女に
ゆびをけかせてもいまごとるれまさへ堪忍せざるハすまひるる
に我ころしことハいひおかし浅ましかりしや後ますへ
きもちもせん二人ハよそく一方から我腹を切
むとおもひ寄りの紀戸をけやぶりもそでにかんと
ぜしと紀らし紙より志でとむかしのあくた
まことてかりくりて月ならげよられバ我妻なりこは
いかにしおど続けバ女かなしごとをかし志ハ始終くし

おろかなるれ人ハ志のひく密夫ありとも知らさねすら
ひるに丈の男として妻に不義をせられむやなく
われもいさよとろうれバとてなどてふ義をかんぐ
実に志らざらんけれどあらざらんまハ妻にさへ志ら
ぐとのさまふほどの沙汰られバいかがあらじとおもひ
けくこそ志らざらんとハいひつれ今かくなるべきうすと
おもひわが里よりむつましくはかりぬるれならし
りとを母の我志似としてまれよなりてくれな
といひく志らざらハざる似むさぶらをうしたのもし
なりといへども丈も此孫ひとつ紀こを貞にを謀とらんド
よくこそ志られ此母猫女がわれふ義とすてあめる
ハ大きなるあやまりなりこれとゆるせと我会を

ゆゑこびたりさてわかうよにおよべバ妻をとしく
しけく寵愛をひそかにくしてたり濫妻ものぞ
ことがさろしめまどもく岩木にあらざれバ恥と
ちぢはといふすなくかなしび武士ておりくとむけ
むるを面目なくやおりひたんそれよりすぐに出ぬ
こへ欠落しくそのちハ死やたまりたんかなしび
ゆれどかひなしずとなむ

賛

雲藹護月幾奇眠　塞溢風埴磋列妖
一婦巧訂雖守義　鳥知肆出彦不條

和歌

ことすらいなどゆるしたんワくされ

よしなく添ぬる人ハおもハん
かたちもさることながらつまの
うらみをまけるいりがたかるべし

評

善哉婦人不道と戒しむといへども濫夫ありて
引きうびかれをかハ父殺するに逢ゆるすといへ
どもあてさかのすは此一事におゐてハ松柏の志厚む
にとゞまるといへども知ありて知ならざるハ女子
まとぬるく賢しとかるしといへども此婦人は
三つのあやまりなり第一家なれがゆゑは濫夫は
玄策とゆるしまへ愚とおもひそり第二謀のさ
めに仕女とゝく私親とりがれのがるとといへども

淫婦ハ妻とおもひくりたるもの不従して不義にしるさ
ぐるにあらず身三從にしたしく仕女といへども淫ま
ばり入不義となるさしむる事とげし我身いさ
ぎよからず仕女とけがせり此三つの罪ハのがるべから
す道と志らざるものハ是を以て貞なりと知わりと
してこれをしるこそり知たる人ハおそらく松柏の
縁友山よりまさるものとおしむこれ何れゆへでま
愚にしくそむくて妻氣禀の美に出て是を守
げまじ正道より出ざるがゆへなり今此婦人や志ハ
やさしけれども貞女に似て貞ならざる知るべし
まことなるし郷原ハ徳の賊なりと孔子のたまひし
も此推てしるべし此語をよくしるべしと明

ふせんとすること聖学によらずんバあさましかる
がゆへよく人の父母となりて子供いろ〳〵にしかすべし女
子をいふとも学ばしめんずる所致なるよ

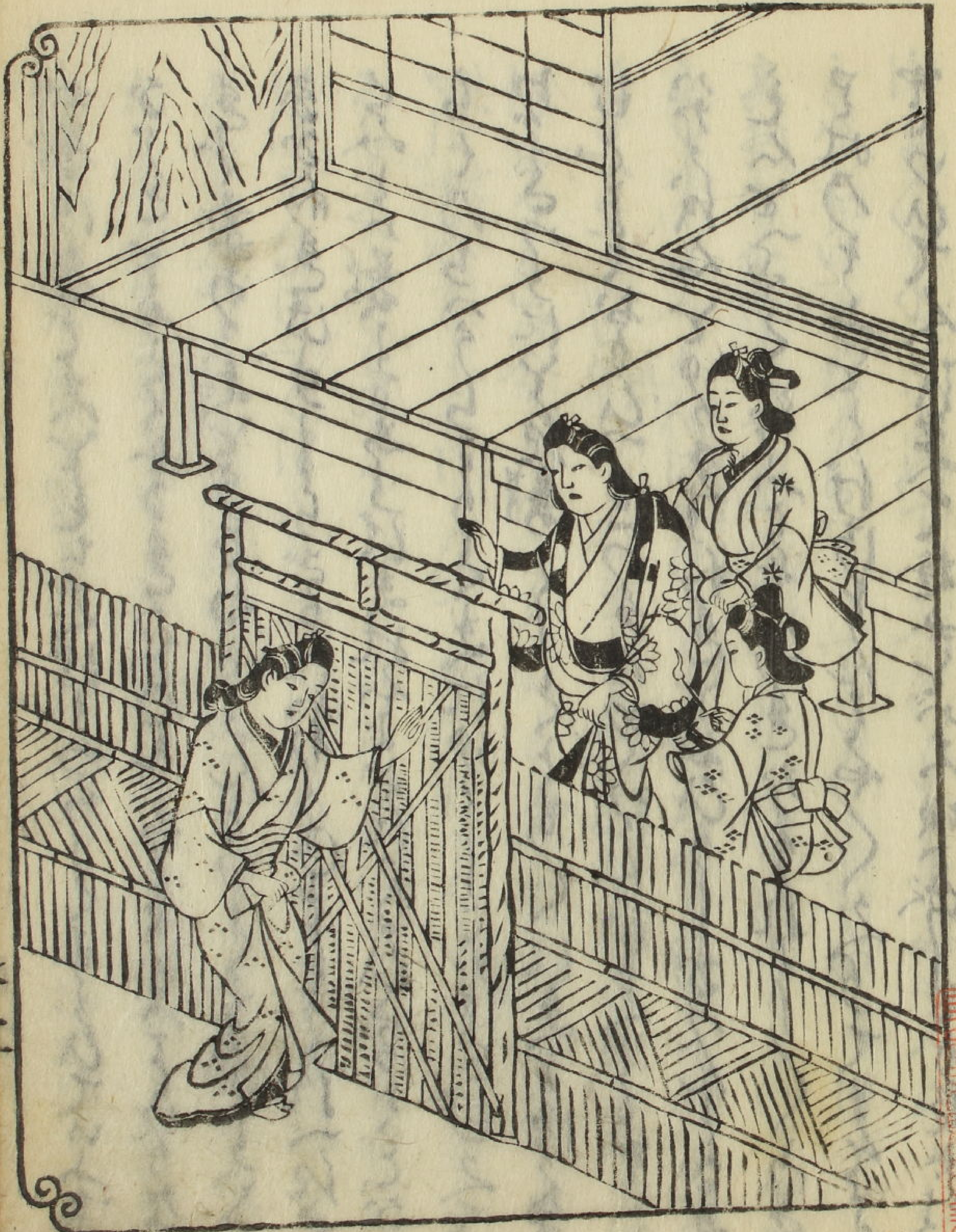
論

或問烈女かくのごとくなれども淫婦あり如此愚婦なりとかく〳〵
なれども此乃節にあらずわるくじいんがまたくじ
云夫婦として好く妹とも妻ていへども禽
獣の行にしてく人倫の不容と絶せしひ妻ありて
不義とあざむくいまだ過ちもなきさしなくして
七去の法にまかせてもわるくいはんこれと害まじ
妻なるにまの身として不義とまたむるや
かく妬を変じくありて不義の妬ハ變(?)しに

それなるべけれど有まじき道理といひきかせ其
人といましめて思切せてに若はなし然るに
これを責ともせ只まじきほどの不道仁なるは從者
とかく奉行所に訴と妻敵と名のらせ或は其の
ひまして後悔させるもなかるべしと或は
念でなかるひはなげくわるひはそうしまと若にら
むけれまた愚と教て名代なくけれ下にさべし若
をばとはく理を捨てなくもまたたしかにて言入る
ども聞ざるに一言ともふ義にゆるすは道すぎれど
恥しく自殺せんよりかはわしと

一足もいはぬ武士なるかいつのはまなりとも難儀はわがり
の人なりしとも父母早世して一人身なりしかば

知恵のおとるしは老人をそらめく他所より妻を娶り
ましは武士遊乱好をうして大坂に傾城をうてひとさ
揚はは家舎の取かけて入りはりのは公用などにとだ
けく揚く夜女を寝伏して揚女をよびよせりておそ
ぐりわるは物末の見限さぐいて男当妻は家傾城をさ
めく戸をとらく其をまるうんと仕女出くうれは女な
ま例なるしぬるかまたはおどろかすの女房にらくと
は女房紙燭けをくおりては出これをとりてくいろる
ゆくまくに酒うれざさろと同揚女が妻に見付しき
て言葉なし妻は肘揚女をとりてはそび揚をと口論れ
どもとかくすいれんそをこしも嫉妬のんなてて剃へ
おりまやまあがりかけりとして揚女はわりさ母を出人



早稲田大学図書

がうちやまくバ行つハくるしからんまれんくまでに今すこ
程ハ此家よりしよせ郭としてまの志て○ともらせ
んやよくめしつかいぐやとおもひしが今宵あまりま
たふどうれうしうねよそこしいろこ猶あうてた
がゐよいふべきとどがれバちがしみんわくせうし
が姪女のかくこ猶よまい紀さるみわる紙仕女かんつけてう
じいとりく引れ女房にそてまうか女房とりて引る紀
見んれバ起請文のことをとりをうりこをさ文に云ひ妻袋
さり姪女を呼て妻とかさんとこが云わかとし引いつぐるに
おゆくハ氏の邪れ罰をうけうかんと我妻の身の紀まそ名
雅わり

女房(にようばう)はまで父ともちぐくばうつうしくもらひていゆず
かゞきとおくく女つまてむ尾をおうげろハとつりな
まで妻(め)あるまど(とうど)とうでおとうらんとハよくもおろかさ
よかわきはすしらざうにハおしひどもうれべたさ
くみよ八義(ぎ)もおつばまれんまでにかるひとそとぶ
ちでのちハうらまりくまにゆうしこなさへむくて
わがうこつにとれ義(ぎ)よしくともくにまよはの色
むとしそおりひつまりきハかくづりおりくどもそこ
ハなんとゆうさずわきとおひうしかんとかま
もんとへぶく後へてきハつきなりれけしくうさ
されのそみとしげはそんちやくくりてますぞよ
中といひて人おそへて姪女とべ大坂へ下(くだ)くしまり姪女は

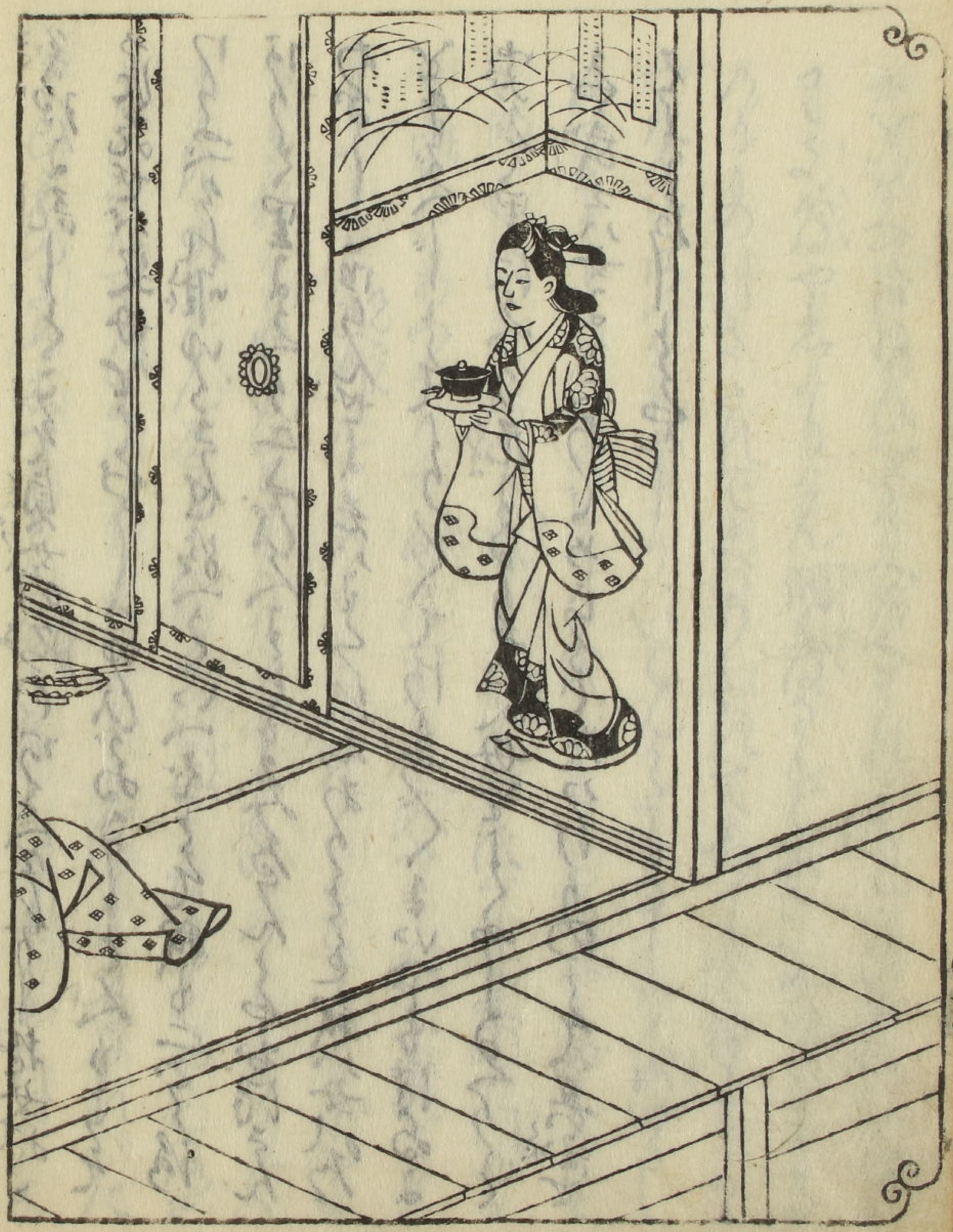
はやくよとつかねてまづまどもうしそまかくりね
くげりいへでちうらなくすぞくとぞかへりけるさて
其夜(そのよ)おさゆふて主高義(たかよし)さりくりにくりうひてやま
さくしうりん酒肴(さけさかな)とゝのへあつものとてぐちら引
てまよすむ例(れい)あすらぬ事るれバ主(しう)もうしやよおもひ
仰のるまし八今くけう年をめく奉公(ほうこう)もしまんすせ
取(と)らバ女房(にようぼう)すくうちわらひて今よハわがんよ祝(しゆく)もう日うそ
さるくバくるぞりしとうりわれ宮仕(みやづかへ)りさぐる世話へ
げはぞかはしてはしきはを語りんとはらくともやとお
だやとんつきてあり兵にて給よくやして茶屋(ちやや)なんど
気じたちきこしめしく宮仕の苦労(くらう)やをまき世話へ
といへどそうかなる男よく機嫌(きげん)いゝすくねおはくら

くひ酒に酔て女の膝を枕としてやすみける女房見て
あはれとりまさこそかくやうなるもののさとりゐし
てたまはりしかば物ごとおりくまでめしつかひのはしたは
きよらかなりし姿をみのかみ見給ひてそもそもまのかなり
はかりことなりしかバ何ぞとてゐかぬるしれども見られバ
我が絶女にてかくゐさかつゆる起請をかりくれたるゐのとお
りかまりよばまいく酒によひぬるかれ神はちまはゆく
なかりて思のみとりわりながら塵を払ひてうつぶ
くまそこらみぬるしあかり衣くをくつるをとやっ
ありしうち嫉妬せし儀式の武士もさる事あり女房にい
ふたいのみえたまひうちかくれとてにきれつまをかなれど
たゞもらぐらで乃なるべく枝とつわりんとあらはして

そハくやしけれどわたしハ此女とあはせさせ給て
りとそりまりつまーぞおりとちぎの讒言いふも是非なき
ぞワが身をうれとまりてけ名の年月もすとかひなく
く女のかなりけるまみえんとげてやうらくハおりなきこ
とりよせてくれわしまいちゆゑとてぞおもひ候まじ
ワがうらたて此嫉妬するハ夢にもはからんじとぞ
ひといはるるにくしとおもりく我をわが思ひやられども
えんとハそうるせ給ふやるどめでたり我ハかずまゐらぬ身
のうらみをすくはれバとかくにうらみもなしとくど
きことく今ぞなきは村雨の袖の涙をはらぬかぎりありうち
しくわが身ハかりとてはにたらくられし身となるを
わがとばはのぞみによりて帰く里へ入りたるおぼしめす

女と生れてはねがひもある事なれくといひければ霜よ
見まず獅子やまてりくん洞窟なんどまゐてあいざしる
かりの引もされどもまたおもされて来りしと袖よとゞめ
人はけはげをあやまりハいらんのもあすいかゞ紙ゆるし
給ふでようらぬんとも どうするぞしそとのならぬ両きんと
さはくにもとびはくり蝶も衣裳をぬぎてまの一門ゆか
ま警くおつまりて白状いさめとへやうびふ鶏とるさ
しかしと也刹をとりてとりつれどもとくもにんよ
そまう孫だちもひとまりたりしともいかゞりそろしぐ
しれすぐらん為さんのちハ毒よわのひくやと給さ
きん銀ハてびくるくりまよまうせし身するればた
よひ衣のさわ志すとも命ハ家もとしかしねども

義理よ死しくこそ貞女の名をはしらくなれりし烈女かな
やに死せバ父母ともぞうしやゆひがあるしと人もこそ
はらふべくれ唯ゆるさせ給へといへどもとても我も二てる給
はりく里よくくり二てびんはもまうみなさんともおはさん
わがしこはらんぜよ君ハとくねんわりとも我ハ女武なりし
と命がへしとそまりくて情まぐくまいへどもはねるよ
実ぞて里にくり尼となりて父母をとくゆするとりと
や武士ハ女まさへおどめらるしたりけりのそ長寿を
たもちけしとぞや



歎吟

語ニ云ク一婦怨メバ潮陽ヒデリスト　可シ見ツ亡ス家ヲ羌女ノ行

聴テ甚ダ言ヲ切ニ人稱ス貞ト　豈ニ崇バン賊徳ヲ郷原ノ狂

謂フ羌女トハ西戎ヲ云フ羌此章婦人西国ノ之娘也故ニ詩中曰羌女

わか

そのまゝにぬれぬ人なきぬのかるもなく
うらみまくる浪まの海士人
あさ人のちかひしるも名とり川
其のたえにやくらくながれく

訳

此婦人やまの紛ようるげを知といへども一旦も
貞烈なる操を守りてあへなくかくよあらつまで
のかは姪女史しらへく婦人とあなどるすゞくに
も説揆を好まう其史とりとも懸甚しる
づ紀示るりまして女の鏡知いちぢんばあるべから
ず志るまとも然れ色なしたまの流勇了
同しつるに髪を断くろを守る此ころにあなと
い列をゆるすみるべ貞列よ似く貞列よなるべ
きあるに似く知よなるず志うりといへども父母を
よく書ろう孝よにされども志げるく孝をゆるし
ろし

論

或問五常仁を似く列をゆるさるや　云婦人は
七去の法ありといへども男子に七去の法なし丈

不義なりといへども夫を捨て里にゆかハ夫を去る
こと　向ふる婬女ありくかくめでたく行わるべし
ぐせん　云此婦人聖賢なりといへども智なし
夫の悪行を見ながらあつかひ諫むべきことなり
時々いさめてもきかずバ夫の一りんにお後して
人にあらせびして夫の悪行をとるをすべきことなり
夫の不義を見ながら諫めざれバ夫を死地
におとしいるゝ云義よりもまされて罪科よ猶ハ務
夫の名をたゞさんよりハ仁ぞいさむべき夫に義な
かるべからず我親の名まで汚しいさゝし我身まで
いさんようらず牝鶏晨するハ家の滅なりと古人の
いへるハまことなるべからずやまことに婬女ハ日じめて幸せ

むといひしも理なり人の目にハさとく姦やうなれ
とも貞女の心ざしにハおよばず行ひで賤しき婬女と妾
うして夫婦のよしを我夫とするぐんや是非ご
とんの心わるく平女におほくかなしくふくて
さりのいるほどもなるべし務求めて下るなり
聞まりしいさめてもきかず親族いさめてもきかず
ばんばいむかきん　云かくの如くなるハ縁ざるに
まうじ[?]縁をいきこれげり怨人としてすぐしぞ
の時におほくハ婦人身をいさめしせバ死ぞ
期あるべし又里にゆきてぞくもなるべし今なり
偏しげりし此婦人[?]ハ天よりあらず夫婦
を去る道あり賢なくまで妻をやまらわきども

手拂といふハ夫のあやまちにあらずして去のすにござ
つまくだり再嫁に疵あらん事とおもへバなり朋
友故ありて交りは絶もわざとさにあらずとこしぬ悪
とまうけく義絶もく人としく交わりしかん事
をおもんバかりむかし曽子藜蒸によりて妻をさらん
と欲すあるとき妻に丸薬をせんぜしむ其のこう
ちをあやまちすといふて去れバ人ミな是を変と実よりて
にあらずハざといふまじ此事ハいりてと是ほの事
まく婦人より絶とつけ妻の咎をとらくして去らん
としたるにもまさにひと嫁さしめんと思へバなり
七去をゆるせる男子さへかくのごとし況や婦人の身と
して夫の悪をおもへつするハあるまじき事なり

離義絶せらるゝ夫婦のわかれハわがあやまりおこらず
し義ハ又もとのごとく里に帰れどもひとり男
子のはゝとかくすればこそ作りて利口に弁舌
をつくし夫をそしりて舅姑と調ひて夫に仇なたらし
嫉又ハ夫の親類くびとどくとすといへども己が是
を立て夫をさゝへて三の善をくつがへすとり
凡女にもなかおとりくはしるなくあるさまじ又批
鶏旦するに批むやみとひん女の徒あらずさる事
わりとも歴くの玄葉とほくしまび谷べき命
益をつくるの志あらハ夫の心もなどかすとほうげん
つるよ夫の悪事を邪しくまた国を追放せらるゝやう
なる志をやなり婦人の不貞これより大なるハなし

或問古書には両夫にまみへざるをよくも見え
と称す吾子何ぞ是をゆるさるゝ　云いはく一の
夫といふハ二度まみえぬ節をもちたるほどの女子ハ百行を
まこと聖賢の論ハ凡と実ならず婦女のならひ
殊更二夫にまみへざるの義甚いさぎよくとも百行
よらずんバ貞女の名称しがたしあまりまん之
かゝりとてハ貞女列女といふいひがたしや
ひ再嫁するとも百行善にして不孝なく
むバ夫女さらん古ハ一度とも時とし今の時処位に
再嫁せざるかるべしがら事なり
同父母とも其親とひく孝をゆるさずハ
何ぞや　云其身再嫁せずして父母と共に

然におゐてハ難なし　さりながら忠臣ハ孝子の門に出
といへり夫とそこなふてゆくよそのちかりつゝ
なりの何がしの娘と女の親の名代を汚さん知
りのハ牝鶏の風をなすとひふして眉をひそめ
云義の論にいでゝも毫髪をもさぬ名を
げてしたまけるを正不正まじハりなかる名ハいさぎよ
からずさらバ夫とそこなふもいかならず父母の名とけ
がす又わくわりのむなしきと厄にあらして貌を
いかなり父母の心かくしかもこれらきたる女ハ源氏の
孫またる様のひくにひさひげみとられなずそ
一家両親をぐれバ後悔あるまじく多し　あるひとハ
こそ孺婉然のていなれ別しても親にはおゐて孝をゆ

はしがこし讒言の家をちらしハ舅姑へのふ孝

なりずや婦人の名ハわが父母に孝行なりとも舅姑

に不孝ならバむなしき名となす